あとがき

私が生きてきたのは現実世界だ。本書の中で“私たちが生きる世界”と呼んできたものだ。そこで色々なことに触れ、色々なことを考え、色々な行動を取ってきた。本書でお伝えしたいのは、“私たちが生きる世界”を適切に生き続けるための「思考の在り方と行動の姿勢」である。“適切に”という表現が曖昧だと言うのであば、“自分らしく”という言葉に置き換えよう。

私が言いたいことの一つは、長い時間をかけて多くの人たちの努力を経て確立されてきた理論、法則、常識、ルールといったものを一旦脇に置き、目の前にある物事や現象に直接向き合うことから、一般的に認知されているものとは違うものが見えてくるということだ。

それは、理論、法則、常識、ルールといったものから直ちに生まれてくる結論とは違う新しいものであったりする。それは、創造につながることも多く、新たな知識、理論、法則を生み出すこともある。既存の理論、法則、常識、ルールといったものを使えば、結論を効率良く導き出すことができるが、新しい発見をしたり隠れているものを見出すに至ることは稀だろう。

ここで紹介したいものがある。ある古老の教えを聴いて、これを切っ掛けとして考えたことだ。目前の物事や現象に直接向き合うことの価値を理解する上で、役に立つだろう。次の通りである。

暗い所で何かを探したり仕事をしたりする時、灯があるのはとても嬉しいものだ。探す場所がよく見えるし、仕事をする手元や道具もよく見える。灯のお陰で作業を手際よく進めることができる。

近代以降の文明がもたらした成果の１つは、闇の克服だ。灯による明るい空間が、昼夜を問わず活動する人々を支えている。太陽の光の下で活動するよりも、文明が作り出した灯の下で活動することのほうが多い、という人たちの比率は、現代社会ではかなり高いだろう。

少なくとも、文明の灯の下で活動することは皆無という人はゼロに近いのではないだろうか。私たち現代人は灯なくしては生活できない状態にあると言える。

文明の灯に頼り切っている私たち現代人は、暗い闇の中に身を置くと不安になり、直ぐに灯をつける。灯に頼って周囲の状況を把握し、為すべきことは何かを判断し、行動を起こす。

このようにして、私たちは問題を解決し、目的地へ向かう。ところが、こうした状況把握や判断や行動が全く通用しないことがある。灯が邪魔をすることがあるのだ。

民俗学を研究されている或先生の講義の中に、たいへん興味深い話があった。研究領域の関係で、この先生は暗闇の世界を何度も体験されているらしい。先生の話とは次のようなものだ。

江戸時代末期のこと、或人が遠浅の海岸で夜の漁に連れて行ってもらった。潮が引いた後の潮溜まりに残された魚を、徒歩で沖へ出ながら捕獲していくというものだ。若い漁師が付いてくれた。

遠浅なので、魚を捕りながらどんどん沖へ出ていく。夜のことなので松明を煌々と焚きながら作業をする。かなり沖へ出た後、帰ろうとすると、どちらが帰る方向なのか判らなくなっているのに気付いた。

一行は困惑した。松明をかざして方向を見極めようとするが、全く判らない。あちこち歩きまわっている時、千鳥の声に気付いた人がいた。幸いにもその人は千鳥の習性を知っていたのだ。

千鳥の声を導きとして、一行はようやく浜に帰ることができた。網元の家に戻り若い漁師がこの顛末を報告すると、居合わせた古老が言った。「なぜ松明を消さなかったのだ」と。

古老が言おうとしたことは、次のようなことだ。暗闇の中で灯をつけていると、身の回りはよく見えるが遠くは全く見えない。暗闇の中で遠くを見ようとする時には、灯を消して身の回りを暗くすれば、本来の五感が働くようになって遠くが見えるのだ。

古老のこの一言は経験から得た真実だ。実際に自分で似たようなことをしてみたらよく解る。そして、この古老の言葉はさらに広く展開することができる。

私たち現代人は常に灯をつけて身の回りを照らしている、と言えそうだ。物理的な灯ではなく、灯に例えられるような手段によって身の回りを把握しようとしている、と言った方がよいかもしれない。

企業経営のことを考えてみよう。闇の中に紛れ込んだ時のようにどの方向に進むべきか判らなくなることが結構ある。通常、こうした際に頼りにするものは、情報や諸々の経営の理論や知識だ。

そして、その情報、理論、知識が力になって問題が解決されることもあれば、うまく

いかないこともある。ここで、もう一歩踏み込んでみる。頼りにしているこれらのものは「灯」ではないかと。

この「灯」があると、色々なものがよく見える。経営上の問題を解決する上で大いに役に立つのだ。ところが、中期的或いは長期的領域まで視野を広げた場合にはどうだろう。

そういった場合には、情報、理論、知識に加え、経営者の想い、意志、感性的な予測といったものが入ってくる。そして恐らく、この後者の部分の比重が相当に大きくなってくると思われる。

この後者の部分、即ち経営者の想いや感性に関わっている部分をしっかりと働かせるために必要なことが「灯を消す」ということではないだろうか。情報や経営の理論や知識を一旦脇に置くことが「灯を消す」ということになるのではないだろうか。

個人の生活の場でも、自分は何をしたらよいのか、どちらの方向に進むべきなのか、全く判らなくなることがある。まさに闇の中に置かれたような状態だ。

こんな時にも、一旦「灯を消して」みてはどうだろうか。現代文明から一旦離れてみて、自分の感覚・感性と想いから浮かんでくることに自信をもって集中してみてはどうだろうか。

そういった過程を踏んだ後に、再び自分が置かれている現代文明の中へ戻ってきた時、何か素晴らしいことが見えるのではないだろうか。私たち現代人に今必要なものは、こういったことのようだ。

「闇の中に紛れ込んだと感じた時、灯を消して遠くを見てみよう。自分の進む方向が判らなくなった時、一旦現代文明を離れ、自分の感性に自信を持って未来のことに想いを集中してみよう」。これが、民俗学の先生と古老の教えから得た貴重な結論だった。

古老が言っていたことは、既存の知識や思考の枠組みを一旦外して、直面している現象に直接向かい合うべし、ということと同じだ。このような思考の仕方を多くの人たちに活用して欲しいと考え、現象思考学という旗を掲げた次第である。

平成２９年7月１０日